



＜ラムサール通信＞

2016年3月11日発行 第177号

2016年最初のラムサール通信です。前号からしばらく間があきましたが、活動をお休みしていたわけでは
ありません。後述するように2016年度は新しい事業計画をいくつか準備中で、2月19日には、安藤会長と
磯崎、岩間、武者、林、亀山副会長、中村事務局長が集まって緊急の役員会を開催。基本方針を計議、決定
し、具体的な活動をスタートさせることになりました。それでは今回も盛りだくさんのお知らせや活動報告
をお届けします。

●ラムサールシンポジウム2016＜中海・宍道湖＞、8月27～29日、開催決定●

ラムサールセンター(RCJ)が、環境庁、新潟市、日本国際湿地保全連合(WIJ)、「新潟の水辺を考える会」
などと共催で、日本初の全国規模の湿地シンポジウム「ラムサールシンポジウム新潟一人と湿地と生きもの
たち」を開催したのは、1996年11月でした。

当時、日本のラムサール条約登録湿地はまだ10か所で、地域はすべて滋賀県の琵琶湖以北、ほとんどがガ
ン・カモ、シギ・チドリなど水鳥の生息地でした。しかし、多彩な自然環境の日本には、全国に多種多様な
湿地が数多く存在していて、ラムサール条約は条約に登録されているかどうかにかかわらず、すべての湿地
の保全と賢明な利用を求めています。

そこで「ラムサールシンポジウム新潟」は、全国の湿地の実情を広域的多角的視点から俯瞰し、関係する
人々（行政、研究者、企業、開発機関、NGO、地元住民など）の相互の情報、経験、技術を交換し、知見を
集積して、効果的なネットワークを築くことを目的に開催されました。3日間のシンポジウムには、北海道
から沖縄まで約400人が参加し、50近い研究・事例発表が活発におこなわれ、大きな成果を収めました。

それから20年。2016年3月現在、ラムサール条約の締約国は169国、登録湿地は2231になり、日本の
登録湿地も北海道から沖縄まで50に増え、湿原、湖沼、河川、干潟、サンゴ礁、地下水系、水田など多様な
湿地が登録されました。そして、全国各地にさまざまなNGOや市民グループが誕生し、「日本湿地学会」が
発足するなど、日本の湿地保全の歩みは確実に前進しました。

しかし、条約がめざす「すべての」湿地の保全と賢明な利用、その前提としての人々の参加と具体的な計
画に基づく管理は、必ずしも十分に達成されているとはいええず、依然として各地の湿地はさまざまな課題を
かかえています。

「ラムサールシンポジウム2016＜中海・宍道湖＞」は、ラムサールCOP5（1993年、釧路）からおおよそ
四半世紀後、もういちど全国の湿地関係者が集まり、ラムサール条約と湿地に関する取り組み、現状、課題
のレビューをおこなうとともに、これまでに得られた経験・技術・手法などのとりまとめと共有を通じて、
いっそうの相互支援と連携を強化するため、鳥取県と島根県の協力・支援のもと、中海と宍道湖の2つのラ
ムサール登録湿地で開催します。

シンポジウムは、松江市で開催される「日本湿地学会」（8月27～28日）と連続開催の予定で、RCJ、WIJ、
日本湿地学会、環境省、鳥取県、島根県、中海・宍道湖・大山圏域市長会、中海水鳥国際交流基金財団、ホ
シザキグリーン財団が共催します。詳しくはまもなく単独のホームページ（HP）を開設予定で、RCJのHP
でも随時、広報していきます。みなさん、今年の夏は中海・宍道湖にお集まりください。

●アジア湿地シンポジウム(AWS)、2017年に佐賀市で開催予定●

次のラムサール条約締約国会議は、2018年にアラブ首長国連邦ドバイで開催されますが、その前年2017年に「アジア湿地シンポジウム(AWS)」を日本で開催する計画を進めています。COP9の決議IX.19によって定期的な開催が求められているAWSについて、RCJとWIJは昨年度後半から環境省や日本湿地学会と協議を重ねてきましたが、このほど、2017年に佐賀市で開催の方向が固まりました。

第1回AWSはCOP5(1993年、釧路)のプレシンポジウムとして1992年に大津市と釧路市で開催され、その後、2001年マレーシア・ペナン、2005年インド・プバネシュワル、2008年ベトナム・ハノイ、2011年マレーシア・サバ、中国・無錫、そして2014年カンボジア・シェムリアップとアジア各地を巡回してその目標、役割を果たしてきました。そして、25年ぶりの日本での開催になります。

有明海には日本の干潟の4割が存在し、東よか干潟(佐賀市)、肥前鹿島干潟(鹿島市)、荒尾干潟(荒尾市)がラムサール条約に登録されていて、四半世紀ぶりの日本での開催の舞台にふさわしいロケーションです。今後、順次、詳しいお知らせをしていきます。ご注目ください。

●2016年度の新規事業計画について●

ー東京湾「江戸前」湿地(大森の海)と文化の再生ー

ーインド洋ベンガル湾岸湿地協力国際ネットワークの構築ー

RCJは来年度(2016年4月～2017年3月)の事業として、国内で「東京湾」、アジアで「ベンガル湾」の2つの新たなフィールドを基礎にした活動を立案し、次のように助成金申請をおこないました。

地球環境基金に「東京湾『江戸前』湿地と文化の再生を通じた地域活性化ー1964年から2020年へ『里埋立地』大森の海が遺してきたもの、そして挑戦ー」(1年事業)、経団連自然保護基金に「インド洋ベンガル湾岸諸国の湿地協力国際ネットワークの構築ー地域住民の気候変動適応、防災、生物多様性保全に対するキャパシティビルディング」(3年事業)。前者は、2020年の東京オリンピックに向けて、劇的な回復をとげつつある東京湾の水辺環境(大森の海と海苔養殖の文化)の再生と地域活性化、後者は、スリランカ、インド、バングラデシュ、ミャンマー、タイ、マレーシアに囲まれ、有数の生物生産性・生物多様性に富み、流域住民数億人の暮らしを直接間接に支えているベンガル湾の環境保全国際協力をめざす活動で、採択の可否の結果がわかるのは3月末です。朗報が届くのを祈ってください。

また2016年8月5～6日には、北海道浜頓別町と協力して「KODOMO ラムサール<浜頓別>」を開催します。ラムサール登録湿地のクッチャロ湖をかかえる浜頓別町の開村100周年を記念してのKODOMO ラムサールです。子ども関係のイベントではほかに、7月末に韓国安山市での国際子ども湿地交流、11月にはインドネシア・バリ島での子ども湖沼交流への協力打診もきています。参加者募集など詳細は改めてお知らせします。

●大山上池・下池(登録湿地/鶴岡市)を訪ねて●

ーカモとクラゲとホットドッグー

2015年12月末、山形県鶴岡市の登録湿地「大山上池・下池」を訪れました。庄内空港からレンタカーで15分ほどで大山集落の古い町並みの住宅裏にある上池に到着。土手をあがるとすぐに上池(15ha)で、この日は雪が降ったのもあり、江戸時代に造成された池にはカモやハクチョウがたくさん。池の奥の山が、雪の白と松の濃い緑がもやで霞み、飛び立つハクチョウが墨絵のようでした。隣接する下池(24ha)ではハクチョウが池の奥、カモが土手下で休み、こんな近くでカモを見られるのは、人なれしていないからか。「ほとりあ」という観察館の展示でおもしろかったのが、『おいしいカモ・アオクビ「マガモ」』で、ワイズユースをうまく表現していました。

ついでに、クラゲで有名な加茂水族館へ。ノーベル賞で話題になったクラゲ、光るクラゲ、知らないクラゲ、生まれたばかりのクラゲなど、幻想的に漂ってました。クラゲといってもフリフリのかわいい感じのもの、白一色でふわっとしたもの、触手のないものなど、見ていだけで癒され、水槽の前に椅子を置いて何時間でも見ていたかったです。

冬の上池・下池はカモやハクチョウが近くで観察でき、時々真上を飛び、周りはとても静か。寒さもそれほど寒すぎず、庄内空港から遠くないので東京から日帰りも可能。近くに温泉もあり、飛行機を使つての週末の遠出におすすめです。空港のホットドッグが有名で、シンプルでおいしかったです。(佐々木優)



●年末恒例「お礼参りと忘年会」は大盛況●

一年の無事に感謝し、交流を深める恒例行事が12月29日、東京・井之頭公園で開催されました。2020年オリンピックとウルグアイ COP12 で提唱された「湿地都市」を想起しての江戸の水源の池と公園と弁天様ツアーには、会員と玉川上水 NGO など20人が参加。恩賜公園として管理され、新たに池干し実施中の豊かな自然散策路は、家族連れなどで大賑わい。日本人の身近な水辺の楽しみ方は江戸から平成へ、変わらぬことを実感しつつ、「ここも立派な登録湿地候補」と堪能。いよいよ吉祥寺繁華街の忘年会場へ。札幌から姫路からシンガポールからの飛び入りを交えて、遅くまでの大宴会となりました。

＜参加会員＞林聡彦、後藤安子、佐々木優、中村秀次、佐藤湧馬、名執芳博、新田一仁、大村弥加、北本健人、佐藤真久、中村玲子、武者孝幸、亀山保、新井雄喜、長倉恵美子、大原みさと、深澤まりな、土居正典、小松潔、山田真理、田辺篤志ほか。

●「国際湿地ワークショップ・湿地マネージャー研修<ミャンマー>」報告●

RCJは経団連自然保護基金(KNCF)の助成で2013年から「AWS活動の効果的促進のためのアジアのラムサール条約履行後進性地域の湿地調査・研究支援事業」を実施。国際交流の少ない同国のNGOや研究者をアジアのネットワークに迎えることを目標に進めてきました。その最終年度の2月2日、ラムサール条約登録湿地「モインジー湿地」に10か国の専門家、NGO代表を招いて世界湿地の日記念事業として国際ワークショップを開催しました。

記念式典には環境保全森林大臣らミャンマー政府要人、野生生物保護区レンジャー、NGO代表ら150人が出席。大臣は湿地保全の決意と同国北部のインドジー湖を第2の登録湿地とすること、絶滅危惧種ヘラシギの生息が確認されたモッタマ沿岸域の登録も検討すると発表。詰めかけたメディアからも大きな拍手を浴

びました。インドジー湖は本事業で 2015 年 1 月、国際専門家による調査を実施し、登録を勧告した重要な湿地です。ワークショップでは、ミャンマー森林局、バードライフ・インターナショナル、IUCN、ネパール環境協会、地元 NGO の BANCA と FFI、韓国ソウル大学、タイ・マヒドン大学、マレーシア科学大学、インドネシア・スマテラウタラ大学から湿地の生物多様性、渡り性水鳥保護、マングローブの保全と管理などの発表と質疑応答がおこなわれました。

翌 3 日は政府からの要望で、国際専門家を講師に研修プログラムを実施。モインジー湿地、インドジー湖、インレー湖など 7 保護区のレンジャー 20 人に湿地の法制度、湿地目録作成、国際協力などについての研修しました。RCJ 中村玲子事務局長が子どもの湿地環境教育、WIJ 名執芳博会長がアジアの湿地保全と国際協力についてレクチャーしました。

そして 4 日の午前、ヤンゴン市内で RCJ 主催の「ベンガル湾の環境保全のための会議」を開催。インド、バングラデシュ、ミャンマー、タイ、マレーシア、インドネシア 6 か国が共有するベンガル湾の国際協力ネットワークの構築をめざす確認をしました。



環境森林大臣を囲んで記念写真（世界湿地の日）



周辺水田では田植えが始まっていました

【会員会友・短報】

ジェームズ・マックギール： RCJ 若手会員のための英語教室「JAMES Class」を都内で開講。月 2 回、夜 1 時間半、コミュニケーションについて学びます。希望者は事務局まで。

中村大輔： 滋賀県教員在籍のまま滋賀大学院で研究中。テーマは琵琶湖の食文化で、伝統の鮎ずし作りを県下 8 小学校で普及、実践指導。試食会が 2 月 21 日に琵琶湖博物館でありました。

岩間徹： 西南学院大（福岡市）を 3 月で定年退職。福岡大から数えて？十年の福岡暮らし。8 人のお孫さんに囲まれての悠々自適晴耕雨読生活がはじまります。センセー、ひまなら事務局を手伝いにきてください

中村秀次： 日大の学生時代から RCJ ボランティア、卒業後はスタッフとして、活動を支えてくれました。昨年 10 月、NPO 法人エンビジョン環境保全事務所（札幌）に転職。道南のエゾシカを追っています。

武者孝幸： 昨年春、函館市から東京都八丈島八丈町に転居。メールアドレスはママ。＊旧聞で陳謝。

*** 訃報 ***

「じゃいあん」の愛称で親しまれ KODOMO ラムサールのファシリテーターとして活躍された高橋一也さんが、2 月 22 日、急逝されました。東京湾「江戸前」湿地（大森の海）プロジェクトのリーダーとして期待されていましたが、突然の悲報に言葉ありません。冥福を祈ります。

新年度事業のスタートを機に、事務局のボランティアスタッフを募集します。
興味のある方は事務局までご連絡ください。